

消化管各所(食道～肛門管)にはさまざまなタイプの非腫瘍性ポリープが発生する。一つの臓器に限局して発生するもの(食道fibrovascular polyp, 十二指腸Brunner腺過形成など)もあれば、複数の臓器にまたがって発生するもの(IFP (inflammatory fibroid polyp), PJP (Peutz-Jeghers型ポリープ) など)もある。ここ数年、本誌では臓器ごとに、“知っておきたい○○○病変(疾患)”あるいは“まれな○○○病変(疾患)”というテーマでかなりの特集号を組んできたが、そのほとんどは腫瘍性疾患を主体として取り上げており、今回のテーマに属する疾患はほとんど掲載されていない。本誌で非腫瘍性ポリープをテーマとした特集は、近年では2012年の「胃ポリープの意義と鑑別」(47巻8号)、2013年の「非腫瘍性大腸ポリープのすべて」(48巻8号)であり、腫瘍性疾患(腺腫に代表される良性病変や腺癌などの悪性病変)に比べると、生検で腫瘍性が否定されれば経過観察可能な病変も少なくないため、臨床医には無症候的な病変は軽視されているものも多いと実感している。このため、本号ではこれまでほとんど取り上げられることのなかった食道や十二指腸のまれな疾患も含めて、上部消化管の非腫瘍性ポリープについて、執筆者におおのの疾患における内視鏡所見(特徴)とそれに対応する病理組織像(非腫瘍性と判断する組織学的根拠も含む)を提示・解説していただき、読者に腫瘍性ポリープとの鑑別診断に有用な内視鏡所見の理解を深めてもらうことを目指した。

まず食道では、新井論文に示されているように、隆起(ポリープ)を呈する非腫瘍性疾患そのものが少なく、かつ、病理学的にもfibrovascular polypなど極めてまれな病変もあり、その好発部位や特徴的内視鏡形態を脳裏に刻めば、類似の形態・病理組織像を呈する腫瘍性ポリープも少ないため鑑別が容易となる。新井論文で示されたものは貴重な症例と言える。また、胃食道逆流症に伴い食道胃接合部領域に発生する非腫瘍性(炎症性)ポリープでは、生検病理組織では少なからず反応性の核異型がみられ非上皮性腫瘍、悪性腫瘍などとの鑑別が困難なことも少なくない。PG (pyogenic granuloma) のように(主題症例; 竹内論文)、NBI拡大観察所見における腫瘍との鑑別に有用となる指標の集積が必要であろう。

胃の非腫瘍性ポリープについては、日常臨床にて消化器内視鏡医がしばしば遭遇する代表的な胃底

腺ポリープと、*H. pylori*除菌と感染率低下により減少してきている過形成性ポリープをはじめ、近年注目されてきたラズベリー様形態を呈する腺窩上皮型過形成性ポリープや、まれな過誤腫性の若年性ポリープ、IFP、異所性腺、粘膜下異所性胃腺の典型例の内視鏡の特徴(画像)を、その病理組織像も含めてわかりやすく解説している(入口論文)。一方、病理組織学的見地からは(伴論文)、これらの疾患を上皮性変化を主体とする病変と、粘膜下を主座とする腫瘍性病変に大別し、背景粘膜を含めた病変の病理組織像の成り立ちが病変全体の形態にどのように反映されるか解説しており、他の腫瘍性疾患との鑑別診断の一助となろう。また、IFPでは急速に増大したり形態変化を呈したりして、悪性腫瘍との鑑別が問題となる症例もあり(主題症例; 中尾論文)、注意が必要である。

十二指腸病変では、最も高頻度に遭遇する異所性胃粘膜(胃上皮化生)、Brunner腺過形成について、辻論文では臨床サイドから、九嶋論文では病理サイドから背景にある正常な十二指腸粘膜の組織学的総論を通じてその成り立ちをわかりやすく解説している。これらの病変はいずれも表面粘膜が胃上皮化生(胃粘膜)に被覆されていることが多く、生検では病理組織像も類似しているため、好発部位や隆起形態、腺開口部、拡大観察はじめ超音波による内視鏡所見などを含めて総合的に鑑別することが必要となる。その他では、リンパ管腫(リンパ管拡張症)、比較的まれな胃でも生じる異所性腺やIFP、さらにまれなPJPやmuco-submucosal elongated polypなどの疾患についても、内視鏡と病理組織の典型画像が提示されている。

なお、これらの非腫瘍性病変の中には腫瘍様病変という側面を持ち合わせているものも少なくない。PGはlobular capillary hemangiomaとも呼称されており、以前から胃の過形成性ポリープの悪性化(主題症例; 工藤論文)はもとより、十二指腸の異所性胃粘膜やBrunner腺過形成は十二指腸癌の発生母地の一つとされている。今後は胃のラズベリー様の腺窩上皮型過形成性ポリープと腺窩上皮型粘膜内癌との関連性についても検討が必要であろう。本号を契機として症例が集積され、今回取り上げた非腫瘍性ポリープの悪性化への臨床病理学的知見が明らかになり、本誌にて再度特集が組まれることを期待したい。